シリーズ　市民美術展入賞作品紹介

わたしの作品

【洋画】市展賞
立ちすくむ、子ども

【相生町４丁目】
伊藤広美さん

職場を退職して、なにか趣味を始めようと思い、以前から興味のあった油絵を習い始めました。昨年に続き二回目の出展ですが、今回はじめて「市展賞」をいただき、とてもよろこんでいます。また、油絵を描いていくうえで、良い励みとなりました。

まだまだ新米ですが、自分のうったえたいものを表現し伝えることができるような作品を目指し、これからも絵を描き続けていきたいと思います。

【工芸】市展賞
白梅の詩

【吉方】
中江美千代さん

藍染の作品展を見学したことがきっかけではじめました。もう六年になります。

この作品は、オリジナルの模様を考え作り続けることに悩み、ひとつの節目にしようと作った思い入れの深いものです。この作品が市展賞に入選したことで、私なりの藍染の作り方に気付くことができました。

これからも、私にできる精一杯の作品を作りつづけたいと思います。

市民図書館の司書が調べます

まちで見つけた「なんでだろ～？」

有島武郎が鳥取砂丘を訪れたのは大正十二年四月三十日のことです。帰京したあと、有島は知人に次のような手紙を送っています。

「山陰は思つたよりあかるいよい處でした。鳥取之砂丘にて唯一首だけ出来たのを

濱坂の遠き砂丘の中にして
侘ひしき我れを見出でつるかな」

（『有島武郎全集』第十四巻（昭和六十年、筑摩書房・刊）

有島は、旅行中にできた歌はこれだけだったと書いています。そして、一ヵ月後の六月九日、彼は軽井沢の別荘で婦人記者だった波多野秋子と心中し、鳥取市民にも大きな衝撃を与えたのでした。

砂丘の旧砲台にある歌碑は、鳥取文化財協会が有島をしのんで建立し、昭和三十四年四月十九日に除幕式を行ったものです。碑面には有島の妹である山本愛子さんの書で、

「浜坂の遠き砂丘能那可尓して
さ悲し記我を見いてけるか裳」

と刻まれています。しかし、先の手紙からも明らかなように、歌碑の歌は有島が実際に詠んだ歌とは少し違っていました。そこで、そのことを早くから指摘していた鳥取大学名誉教授の遠山正瑛さんらは、平成三年、旧砲台からほど近い砂丘の高台に有島武郎と与謝野晶子の二人の歌を並べた歌碑を建立。有島の命日にあたる六月九日に除幕したのでした。新たな碑には遠山さんが発見した有島の直筆色紙がそのまま使われ、

「濱坂乃遠き砂丘の中尓して
侘し幾王連越見出でつる可奈」

と刻まれています。

晶子の歌は、

「沙丘踏み左ひし支夢ニ与可
れるわ連と覚えて涙流るゝ」

というものです。これは、昭和五年五月二十五日、夫・鉄幹とともに砂丘を訪れた与謝野晶子が有島を想って詠んだ歌といわれ、中山町の日本画家・渡辺正子さん（故人）の筆によるものです。

砂丘・旧砲台にある歌碑

武郎・晶子の歌碑

（お詫びと訂正）　10月1日号のまちでみつけた「なんでだろ～？」で紹介した『鳥取県歴史の道調査報告書』（鳥取県教育委員会・編）は第10集まで刊行されています。

印刷　株式会社鳥取平版社